



シュウメイギク

119 編は (アルファベットによる詩) と但し書きがあり、原典は**同じ字母で始まる 8 節の段落が22のアルファベット順に続く**詩編ですが、日本語訳ではヘブライ語のアルファベットを捕らえることはできません。

冒頭に **いかに幸いなことでしょう／まったき道を踏み、主の律法に歩む人は。(1)** とあり、律法を守ることを勧める教訓詩とのことです。律法に向き合う詩人の感じていること、心の思いに注目して、順を追って読みたいと思います。

文字			イメージとなる聖句
6	1	ワウ	私を辱めた者に答えさせてください／私は王たちの前であなたの定めを告げ
詩人は力ある者によって辱めを受け、律法の真実を伝えることを奪われようとしています。しかし、律法を伝えることを決して恥とせず、律法を 愛し、それに向かって手を高く上げます(48) と、広々とした道を堂々と歩みたいと願っています。			
7	T	ザイン	待ち望ませておられます／あなたの裁きはとこしえに堪えることを思い
詩人は、主が苦難のなかでも、忍耐させ、待望させる方であることを受容し、むしろそれによって命を得られ、力づけられると感じています。この仮の宿にあって(54) や 夜ともなれば御名を唱え(55) は詩人の控え目で内省的な心情を伝えてくれます。			
8	π	ヘト	私は自分の道を思い返し 立ち帰ってあなたの定めに足を向けます
詩人は、律法を守ることは自分への割り当てと感じ、時々守れないことがあれば 主の御顔が和らぐのを心を尽くして願い／思い返し／立ち帰って／ためらうことなく／速やかに戒めを守ります と歌います。 夜半に起きて／感謝を(62) など、克己心をも滲ませています。			
9	υ	テト	確かな判断力と知識を／迷い出て、ついに卑しめられました／卑しめられたのは私のために良いことでした
詩人は迷いがあり、そのために卑しめられましたが、それゆえに自らの弱さを知らされ、自らの弱さゆえにさらに求道の思いに溢れます。			
10	ʾ	ヨド	御手がわたしを造り／あなたを畏れる人はわたしを見て喜び／わたしの心が…無垢でありますように
詩人は主によって創造されたと告白し、主を畏れ、主に従順です。また、同じ信仰を持つ人との交わりを愛し、求めています。清らかな信仰に生きたいと願っています。			
11	T	カフ	救いを求めて絶え入り／仰せを待って衰え／煙にすすけた革袋のようになっても／長らえる日々はどれほど／私を絶え果てさせようとして／命を得させて
詩人は迫害の中でも、それに負けずに求道を続け、どんなに弱っても救いを求め続けています。主が裁かれることを待って、主の助けと慈しみを待っています。			

『讚美歌 21』は <ワウ>から<カフ>まででは 378「栄光は主にあれ」、曲 小泉功(1896-1985)・詞 由木康(1895-1985)をあげています。 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2012-08-22>